

就労移行支援機関を利用する精神及び発達障がい者における 一般就労へ至るまでの心理的指標の変化とその要因に関する検討

○香川 紘子（株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所 研究員）

勿田 文記（株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所）

高谷さふみ（社会福祉法人釧路のぞみ協会 自立支援センター）

1 背景と目的

精神障がいや発達障がいのある就労移行支援機関利用者が一般就労に就くには、職業能力の獲得に加え、心理面の安定性の獲得も重要となる。近年では心理面の安定性に重要となる心理的柔軟性を高める方法としてアクセプタンス & コミットメント・セラピー（以下「ACT」という。）の有効性が確かめられている。

社会福祉法人釧路のぞみ協会自立センターの就労移行支援事業所では、精神障がいや発達障がいのある利用者に対して、ACTのエクササイズを含むスタートラインサポートシステム（Startline Support System、以下「SSS」という。）を活用した心理的柔軟性の向上を促進するサポートを行っている。SSSは株式会社スタートラインが開発し、様々な機関で障がいの者の心理面、健康面のサポートに活用されている。この施設では、就労移行支援利用者が、定期的にSSS上のACTのエクササイズを行い、心理的評価指標を計測している。我々の研究では、定期的に測定された心理指標を解析し、利用者が一般就労へ移行する過程で、就業のために重要な心理指標を明らかにすることを目的としている。その第一段階としてこの論文では、十数名の就労移行利用者を対象に、入所の心理指標の得点と就労移行支援事業所での訓練中の心理指標を比較する。また、精神及び発達障がいに分けて、心理指標の変化を比較する。

2 方法

(1) 対象者

就労移行支援事業所を利用している、もしくは、利用していた障がいの者の方、計35名（平均の年齢31±9歳）であった。そのうち、主に精神に障がいのある利用者は23名であり、主に発達に障がいのある利用者は、12名であった。

(2) 心理指標

SSS上で計測できる心理指標は以下であった。

- ① AAQ-II：ACTの心理的柔軟性を測定する評価尺度で、数値が高いほど、「今、ここに存在し、ここを開くことが出来ている状態である」ということを示している（嶋ほか 2013）。
- ② APQ：アクセプタンスの状態が機能しているかを測定する尺度で、4つの因子から構成されている。数値が

高いほど、「行動レパトリの拡大」、「現実の感受」、「私的出来事から回避しない選択」、「リアクションの停止」のそれぞれの傾向が強い状態であることを示している（嶋ほか 2017）。

- ③ BDI：抑うつ評価尺度で得点が高いほど抑うつ状態が高いことを示している（ベックほか 2003）。
- ④ CFQ：ACTのコアプロセスである「フュージョン／脱フュージョン」の状態を測定する2因子からなる尺度であり、得点が高いほど脱フュージョンの状態が高いことを示している（嶋ほか 2016）。
- ⑤ DPQ：脱フュージョンに関して、行動の“形態”や“機能”へ着目した測定尺度であり、得点が高いほど脱フュージョン状態を示している（川井ほか 2016）。
- ⑥ FFMQ：マインドフルネスの尺度であり、日本語版 FFMQは5因子構造となっている（「観察する」・「反応しない」・「判断しない」・「描写、説明する」・「意識的行動」）。得点が高いほどそれぞれの状態が高いことを示す（Sugiura et al. 2012）。
- ⑦ TSSQ：ACTが注目する三つの自己の体験を測定する尺度である。アクティブ、概念化、視点取り、今この瞬間の4因子から成り、得点が高いほどそれぞれの状態が高いことを示す（柳原ほか 2015）。

(3) SSSの実施方法

就労移行所の利用者は、事業所入所時に、SSSを用いて各心理指標を測定し、面談によりそれぞれにあったACTのエクササイズを実施していた。また、個人によって期間に違いはあるが、定期的に心理指標の変化を計測していた。

(4) 解析方法

利用者のそれぞれの心理指標を、開始時から、30日おきに可視化するためにグラフを作成した。しかし、利用期間が個人ごとに異なるため、計測日の期間も個人ごとに異なっている。そのため一定期間ごとの計測値の変化を比べることは難しい。そこで、開始時と移行利用中に心理的柔軟性が上昇することがあるかを検討するために、開始時を除いたすべての期間での最大値（BDIのみ最小値）と開始時の値を比較した。統計解析は、線形混合モデルを用い、従属変数に心理指標の得点、独立変数に固定効果として心理指標の計測時期（開始or最大値の期）、障がい特性（精

神or発達)を含め、変量効果として利用者を含めた。解析は、統計ソフトRを用いた。

3 結果

(1) 心理指標の長期変化

30日ごとの利用者の心理指標の変化を見てみると、すべての心理指標において個人による様々なパターンがみられた(1例として、図1にAAQ-IIのグラフを示す)。心理指標が短期間に上昇し、そのまま上昇が継続する利用者や一度上昇してもまた下降して、上昇と下降を繰り返す利用者など、様々なパターンがみられた。

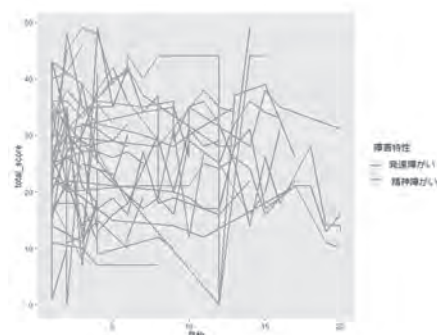


図1 AAQ-IIの月ごとの得点推移

(2) 就労移行期間中の心理的柔軟性の上昇

開始時の心理指標の値と、開始時を除いたすべての期間での心理指標の最大値(BDIのみ最小値)を線形混合モデルにより比較すると、FFMQの下位項目である観察する及びDPQの下位項目である現在との接触の指標以外のすべての指標で交互効果は有意でなく、心理指標の計測時期の主効果が有意であった($p < 0.05$)。すなわち、これらの指標は、精神及び発達に障がいのある利用者が就労移行開始時に比べ、就労移行期間中に少なくとも1回は上昇し、心理的柔軟性が上がったことを示す。また、AAQ-II、CFQ、APQの行動レパトリー拡大、FFMQの反応しない、描写説明する、TSSQのアクティブかつ柔軟な環境への働きかけ、プロセスとしての自己、今この瞬間への気づきの指標については、障がい特性の主効果も有意であった。どの指標においても、精神障がいのある利用者の得点の方が、発達に障がいのある利用者の得点よりも高かった(図2 1例としてCFQを示す)。

交互効果の見られたFFMQの下位項目である観察する及びDPQの下位項目である現在との接触の指標についてはTukey法による多重検定を行った。FFMQの下位項目である観察するでは、精神及び発達障がい両方で、開始時の心理指標の値と、心理指標の最大値が有意であった。一方で、DPQの下位項目である現在との接触の指標は、精神障がいの利用者得点のみ、開始時の値よりも最大値が有意であった(図3)。

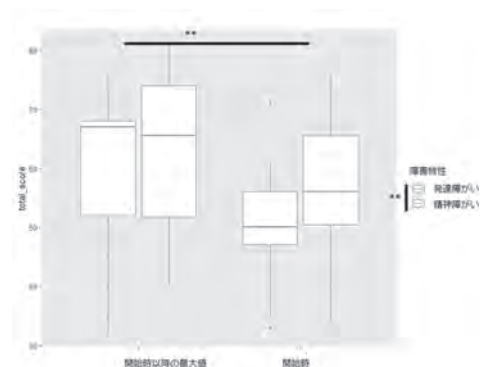


図2 CFQの開始時と開始時以降の最大値の比較

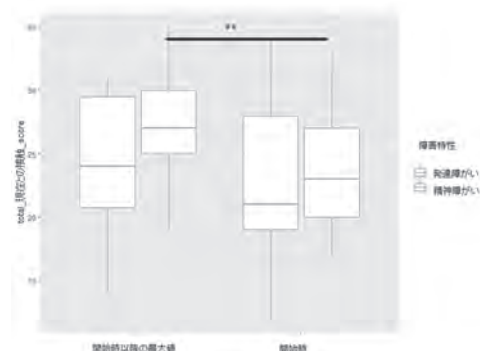


図3 DPQ:現在との接触の開始時と開始時以降の最大値の比較

4 考察

解析の結果、月ごとの利用者の心理指標の変化パターンは様々であることがわかった。また、変化パターンは様々であっても、就労移行事業所の利用者が利用開始時に比べ、移行所で訓練を受ける期間中に少なくとも1回は心理的柔軟性が上昇することがわかった。また、いくつかの心理指標においては、精神障がいのある利用者より発達障がいのある利用者の得点の方が低かった。また、脱フュージョンにおける現在の接触指標では、精神障がいのある利用者のみに得点の上昇がみられた。これらの結果から、ACTによる訓練は、就労移行支援事業所の利用者にとって心理的柔軟性を獲得するために有効である可能性が考えられる。一方で、発達障がいのある利用者は、精神障がいのある利用者よりも心理的柔軟性を獲得するのがやや困難で、支援法の工夫も必要であろう。今回の解析では、心理的指標の上昇がACT訓練とどのように関連しているのかについての詳しい解析は行っていない。今後は、ACT訓練の回数、内容と心理指標の変化、また、それらが一般就労へ至る影響などを調べる必要がある。

【連絡先】

香川 紘子

株式会社スタートライン CBSヒューマンサポート研究所

e-mail: hkagawa@start-line.jp